

## 世界史未履修問題と岩手大学生 ——アンケート調査結果によりながら——

安井 萌\*

(2011年3月4日受理)

The So-called *Sekaishi-mirishu* Problem (The problem that many Japanese senior high school students do not virtually learn a required subject, 'World History') and Students of Iwate University : Findings of the survey

Moyuru YASUI

### はしがき

小論は、さる2006年11月岩手大学生に対し実施した世界史未履修問題に関するアンケート調査の結果報告である。周知のように、同年10月末、全国の高校で世界史をはじめとする必修諸科目の履修漏れが発覚し、大きな社会問題となった。こうした事態を受け、本学で外国史（西洋史）教育に携わる筆者が、おもに学生たちの未履修状況を確認する目的で行ったのが、このアンケートである。

調査は2回にわたり行われた。まず1回目は、西洋史関係の授業を受講する比較的少人数の学生15名（所属学部は、教育学部3名、人文社会科学部6名、農学部5名、工学部1名）を対象とし、2回目は、歴史とは無関係のある授業（教員免許関連科目）を受講する比較的大人数172名（所属学部は、教育学部85名、人文社会科学部51名、農学部15名、工学部21名）を対象とした。両者あわせて187名となる（両者に重複する学生は確認されない）。質問内容は1回目と2回目とで若干異なるが、①高校で世界史を履修したかどうか、②履修漏れの問題をどう考えるか、③世界史が高校の必修科目であることについてどう思うか、の3

つを中心とする点で変わりはない。回答は全員から得ることができた。

ところで、筆者はもともとこのアンケートをもっぱら個人的な参考にするため行ったのであり、結果を公表する意図は持ち合わせていなかった。対象者の種類や人数、質問項目等も、それゆえ科学的分析に適するよう、十分考慮のうえ設定したわけではなかった。もし未履修学生の全体状況を正確に把握しようとするならば、いまだ対象人数を増やし（とりわけ理系学生について）、また設問もきちんと整える必要があっただろう。筆者がこれまで久しく結果報告を怠ってきたわけは、まさにこうした事情による。にもかかわらず今回、調査実施から4年あまりを経たのち、このように小論を執筆することとなったのは、未履修問題が一見したところすでに過去の出来事となり、われわれの記憶から遠ざかりつつある現在、このアンケートは記録としての価値をもち始めたと考えるからにはほかならない。当時の岩手大学生の未履修状況について、たとえ統計データとして多々欠陥はあるにせよ、これはやはり唯一の資料にちがいない。またここに寄せられた学生たちの声は、未履修が横行した時期に高校教育を受けた

\*岩手大学教育学部

当事者たちの、生きた証言であり率直な意見である。全国的に見ても、同種の調査は稀少なようである。管見の限りでは、西岡尚也氏による琉球大学生に対するものが知られるのみである(西岡「高校世界史未履修問題にみる社会科教育の課題——大学生へのアンケートを中心に——」『琉球大学教育学部紀要』72集, 2008年:同改稿版『琉球大学教育学部社会科論集:高嶋伸欣教授退職記念』2008年。なお、このアンケートは07年4月に実施され、同年度の新生、つまり前年の騒動に巻き込まれた当時の受験生たちをおもな対象者としている)。今となつては貴重と思われるこの資料を、一つの情報として開示し、あらためて世界史未履修問題とは何だったのか、また世界史教育のあり方はどうあるべきかを考える材料としたい。これが、ここに遅ればせの報告を記す目的である。

以下ではアンケート結果に基づきつつ、まずは岩手大学生の未履修の実態を示し、ついで未履修問題および世界史必修に対する彼らの意見をまとめていきたいと思う。

## 1. 未履修の実態

アンケート回答者187名のうち、高校で世界史を履修したと答えた者は144名(77.0%)、そうでない者は43名(23.0%)であった。つまり全体の約4分の1が世界史未履修ということになるわけで、これは同程度の規模で実施された琉球大学生の調査結果(回答者150名中未履修16名[10.1%])と比べかなり多い。岩手大学生の未履修率が高い理由は明白で、それは大半を占める岩手県出身者の履修状況にある。回答者の出身地を確認した2回目調査(1回目調査では出身地を尋ねなかった)の参加者172名の構成は、岩手県出身91名、他県出身81名であるが、このうち後者の未履修は9名(11.1%)である(琉球大学生と同水準)のに対し、前者の未履修は35名(38.5%)であった。岩手県出身者の未履修率は、他県出身者の3倍以上ということになる。

文部科学省の集計によると、全国の高校5,408

校のうち663校(公立371校、私立292校)、つまり全体の12.3%(公立9.2%、私立21.7%)で未履修があったとされる。生徒数でいえば、3年次学生の約9%、104,202人が該当するという(文科省資料「高等学校等における未履修の状況について」、06年11月20日時点)。もちろん12.3%というのは全国の平均値であつて、実際の状況は地域によりかなり異なる。当局は都道府県ごとの数字を公表していないが、朝日新聞が同年11月11日時点で独自にまとめた集計によると、未履修の多い県は、①北海道および静岡46校③岩手36校④長野34校⑤大阪26校⑥山形および島根23校、などの順となっている(朝日新聞06年11月12日)。公立校に限定すると、静岡(35校)、岩手(32校)、北海道(30校)、長野(28校)の4県が群を抜いている。岩手は全国有数の未履修多発県であることが以上からわかるが、注視したいのは、未履修校の絶対数よりむしろその比率である。岩手の未履修校36校(公立32校)は県内全高校の38.3%(公立40.0%)に相当する。これは島根の42.6%(公立43.2%)、静岡41.8%(公立35.4%)につぐ高比率である(公立校に限れば、静岡を上回る)。

上述したのは、未履修科目すべてをあわせた場合のデータである。世界史単独で見ると、ではどうなのか。文部科学省の集計では、未履修が発覚した全663校のうち、地理歴史科の未履修校は42%の460校であったとされる。この460校の未履修の内訳はさらに、①絶対必修の「世界史」の未履修のみが見つかった高校:94校、②選択必修の「日本史または地理」の未履修のみが見つかった高校:110校、③地歴3科目から1科目だけ選択履修した結果、「世界史」の未履修と「日本史または地理」の未履修が並存する高校:256校、となっている(文科省資料「高等学校等の未履修開始年度等について」)。つまり世界史未履修が存在した学校は350校(①+③)であった計算となる。これはすべての高校の6.5%、未履修校全体の52.8%にあたる。

未履修校全体に占める世界史未履修校の割合は、全国的には約半分程度という計算になるわけ

だが、かりにこの比率が岩手県にもある程度あてはまると想定するなら、本県全体の世界史未履修率は20%ぐらいとなるはずである。とすると、岩手県出身の岩手大学生の世界史未履修率38.5%は一見、(たとえ上のデータが未履修の「学校」の数であり、「生徒」の数ではないという点を考慮に入れたにせよ)あまりに高すぎるとの印象を与えるかもしれない。しかし決してそうではない。一般に未履修校はいわゆる進学校(ここでいう「進学校」とは何かという問いは、ひとまずおくこととしよう)に多いとされる。岩手大学生の大部分は進学校出身であろうから(大方の国立大はそうであろう)、高校の段階と比べ、未履修者がより高密度に現れるのは、むしろ当然であるともいえる。もし世界史だけではなく、さらに公民や理科や情報など全科目にわたり未履修を調査したならば、はたしてどうなっていたか。おそらく岩手県出身学生の未履修率はさらに高比率、8割近くに達したのではないかと推測される。

さて、学生の所属学部によって世界史の履修状況に違いはあるだろうか。ついでこの点を見てみたい。学部ごとの数値の内訳は以下の通りである。

	履修した (%)	履修しない (%)	計
教育学部	64名 (72.7%)	24名 (27.3%)	88名
人文社会学部	49名 (86.0%)	8名 (14.0%)	57名
農学部	16名 (80.0%)	4名 (20.0%)	20名
工学部	15名 (68.2%)	7名 (31.8%)	22名

比較の大前提として、まず農学部と工学部の数字は、統計的意味をもつにはそもそも絶対数が少なすぎる、ということはあるかもしれない。このことを認識のうえで、しかしあえて傾向を読み取るならば、教育学部と工学部は未履修率が比較的高く、人文社会学部は低い、農学部はその中間だといえるだろう。こうした各学部の未履修率の差異は、確かに相当程度、岩手県出身者の多寡と対応している。すなわち、回答者の学部ごとの岩手県出身者数は、教育学部が85名中54名(63.5%)、人文社会学部51名中23名(45.1%)、農学部15名中5名(33.3%)、工学部21名中10名(47.6%)

となっている(母数は出身地確認を行った2回目アンケートの参加者)。相対的に岩手出身率の高い教育学部と工学部は未履修率が高く、農学部はその逆である。ただし人文社会学部にはこうした相関関係が認められない。これは別途考えなければならない問題であろう。なお、参考までに各学部全体の岩手出身率を、2006年度入学者を例に挙げると、教育学部52.0%、人文社会学部46.3%、農学部23.5%、工学部46.9%である。

文系・理系の違いが世界史未履修にどれほど関係するかは、あきらかでない。2001年11月に文部科学省が408大学を対象に実施した調査によると、文学系学部の未履修率は10%ほどであるのに対し、歯学系学部で31%、医学系学部で26%であったと報道されている(毎日新聞06年11月9日夕刊ほか)。全国的に見ると、文系と理系学部の違いは確実に存在するようである。本アンケートの結果においても、たとえば工学部と教育学部を比較してみると、前者の方が相対的に岩手出身率は低い、未履修率は高くなっている。もっとも、これが理系学生ほど世界史の未履修傾向が強いことの現れといえるかどうか、回答者数の少なさをゆえに断定しがたい。

最後に大きな問題として残るのは、人文社会学部の未履修率の低さである。先の表に掲げたように、この学部の全体的な未履修率は他学部より格段に低率の14%にとどまる。注目すべきは、回答者の半数近くを占める岩手県出身者の未履修率であり、23名中未履修者はわずか3名、つまり13.0%と、54名中21名すなわち38.9%の教育学部と比べ、3分の1の割合となっている。同じ文系学部である人文社会学部と教育学部とで(両学部に数理系の課程があるのは事実だが、総合的に見ての話である)、この違いはいったい何に由来するのだろうか。両学部の岩手県出身学生の出身校がそれほど大きく異なるとは思われず、率直なところ、真相は不明といわざるをえない。ただ、アンケートの情報の範囲で推測する限り、一つ考えられるのは、世界史の学習がそれ自体人文社会学系の学部への進学と関連性をもつということであ

る。つまり将来この学部を志望する者には世界史を選択しがちな傾向がある、もしくは世界史を学んだ者は結果的にこの学部を志向しやすくなる。こうした可能性が仮説として成り立つのではないか。それからいま一つ、両学部の岩手県出身者について、地歴科目の全体的な履修状況をまとめると、

	2科目を履修	1科目を履修
人文社会科学部	15名	8名
教育学部	27名	27名

となっている。かなり微妙な違いであり、統計学的には誤差の範疇かもしれないが、人文社会科学部の学生は2科目履修者が比較的多いようにも見受けられる。大胆な仮説をあえて唱えるなら、もしかすると1科目履修より2科目履修の方が同学部への進学と結び付きやすい、ということがあるのかもしれない。

世界史ないし地歴2科目の履修が人文社会系の学部への進学を促進する、そのようなことが本当にありうるのか、なお検証を要する問題だろう。だが私見によれば、高校の授業が——それがいかに受験体制の枠に組み込まれたものであれ——若者に及ぼす学問的感化力を軽視してはいけなように思われる。世界史をはじめとする地歴科目をきちんと学ば学ぶほど、高校生の人文社会系の学問に対する関心は高まる。その結果、これを大学で専門に学ぼうとする者も現れてくる。こうした因果関係を——短絡のしすぎは禁物だが——多少なり認めることはできるのではないか。

## 2. 未履修問題に対する岩手大学生の認識

続いて、未履修問題を岩手大学生がどう認識したかについて見ていこう。

本アンケートが行われたのは、未履修問題をめぐる騒動がお冷めやらぬ時期であったが、直接的な当事者ではない学生たちは、この問題に一樣に関心を寄せながらも、比較的冷静な態度である。受験生の苦境を思いやる声——「もうすぐ受験だ

という時期にこの問題が発覚して、補習等を受けなければならなくなった高校生がかわいそうだ

(教育学部3年〔以下、「教3」のように省略表記する])「ぎせいになる高校生はかわいそうだ」

(教3)「生徒側には責任はない」(人1)——は

少なくないが、かといってこうした混乱を引き起こした関係者を声高に非難する言説はそれほど見

られない。むしろ、世間の批判の矢面に立っているとりわけ高校関係者に対しては、「高校ばかりがせめられているが、それは間違っていると思う」

(教3)「生徒には責任はないが、先生方が悪いとも思わない」(教3)「履修漏れは学校の責任ではない」(農1)といった同情的な意見が目立つ。

さらに、「わかっていたし、いまさら騒いでもと

思ってしまう」(教3)「履修もれはそこまで大きな問題なのか」(農1)「履修漏れが現実にあった

ことは以前から分かっていたはずなのに、なぜ問題になったのか分からない」(教3)など、世間の騒ぎそのものを疑問視する回答者も相当数見

受けられた。

学生たちは、未履修問題をたんなる教育現場の不心得な行為などではなく、より構造的な問題としてとらえている。それはまず第一に、「学習指導要領と受験の学力のかい離」(教3)「制度と現状がかけはなれすぎている〔こと〕」(人3)に起因している。いくら指導要領で必修とされていても、入試に出ないのでは意味がない。「センター試験で必要な〔地歴〕科目は1科目だから、履修漏れ起こっても当然ではないか」(教3)「受験に必要でない勉強は時間の無駄だという感覚があるのは事実」(教3)「受験で使われない科目に関しては、生徒の負担、あるいは教員の負担も考え、削られたものと思います」(教3)。とりわけ理系学生にとって、社会科(地歴・公民)科目の負担は骨身にしみている。みずからの体験から、「余計な(受験科目でない)勉強をするのは負担だった」(工2)「センターに必要な科目だけ勉強しなかった」(工2)「受ける科目が多すぎるのではないだろうか」(工4)との声があがる。未履修は学校も高校生本人も親も地域社会もが「受験の学

力」を追及した結果、必然的に起こった出来事、「世間のニーズが起こした結果」(教3)である。もちろんその背景には、少子化と大学全入の時代といわれながらも、ますます厳しさを増す受験競争がある。「受験競争が激しくなっている現在、こうなってしまうことは予想されていなくてはならない」(教3)「受験に使う教科以外はやる必要がない、というふうを考えさせる受験競争に問題」(教3)。グローバル化と低成長の時代にあって、学歴社会はもはや過去のものだとしばしば語られる。だが若者たちにとって、それは依然目の前にある現実なのだ。「このような問題が起きた背景には、現代の日本の社会の高学歴が良いとされ求められている現状がある」(農4)。

ゆとり教育や週休五日制との関連性も指摘される。「ゆとり教育を目指した中で、学習指導要領は変えないという〔ことから〕苦しい状況が生じたのだと思う」(教3)「授業時間数を減らしているのに、履修しろというのは無理がある」(教3)「今の週休五日制においては、地歴教科二科目を理系クラスが文系クラスと同じ授業数で学ぶことには無理がある」(農1)。ゆとり教育と教科学習の重い負担との矛盾をもたらし、放置したのは、政府・文科省である。よって、そこには当然手厳しい批判の矛先が向けられる。「授業時間数を減らしたのに履修科目を増やしたカリキュラムを作った文科省の責任ではないか」(農1)「勝手にゆとり教育などと言って教育現場に負担をかけたくせに、このような問題が露呈した途端教育現場を責める政府が許せない」(人1)。同様な意見をさらにいま一つを引用すると、「この間ニュースで「ゆとり教育」と「総合的学習」の時間等の導入により、主要な科目の授業時間数が以前に比べて週に8時間くらい減ったと聞いた。実際進学校においては、教員と生徒が一丸となって科目数が増加傾向にある大学受験へと挑戦する雰囲気になっている。そのような状況においては無理な制度を義務づけた政府の方に非があると考え、未履修は必要悪であったと思う」(人1)。

様々な要素が絡み合って起こった未履修問題。

その責任を高校関係者にのみ帰し、批判してみても、意味がないだろう。本来ならば、入試制度を指導要領にあわせるか―「センター試験の制度の改革が必要」(教3)「必修ならば国数英と同様センター試験でも必修にすべき」(農2)―、もしくは逆に指導要領を現状にあわせるか―「指導要領を見直すべき」(教3)「学習指導要領内でもっと自由度を上げて良い」(工2)―しておくべきだ。現状はそうでないのだから、履修漏れが生じるのはもう、やむをえないことではないか。多くの者が以上のごとく考えるのは、ある意味で論理的な必然だといえる。アンケートの回答欄を通覧してすぐ気づくのは、「仕方がない(しょうがない)」という言葉の、あたかも判で押したような頻出ぶりである。「進学校というのは大学へ行くのを前提とした学校だから、受験に必要な科目を削ってしまうというのは仕方がないことだと思う」(工1)「大学に入るには、履修すべき科目を全て満たすことより、試験で点数が取れることの方が重要なので、仕方がないと思う」(人1)「広く浅く学ぶより、1科目に集中した方が効率がよいし、授業時間数の少ない現状を考慮すると仕方がないのではないか」(教3)。こうした具合に、「仕方がない」の決まり文句でもって、未履修を消極的ながら肯定する回答者は、数え上げると全部で44名におよぶ。さらに「必要悪」「構わない」「よい」「妥当だ」「問題ない」と、これをより積極的に肯定する者や、明言はしていないがあきらかに肯定的な立場に立つ者まであわせると、その数はゆうに60名を越える。

未履修を擁護する回答者のなかには、地方が置かれた教育環境の悪さを指摘する意見も少なくない。「岩手のような地域は、予備校もないし、都市に比べて明らかに学習するには不利だし、情報をキャッチしづらい部分もある」(教3)「予備校や有名私立高校がない中で、学校がやむをえず行ったことだと思う」(教3)「私の地域みたい〔なところでは〕、予備校も大手の塾もないから、公立の進学校が補習を行って生徒の学習を補助するのは仕方がないと思う」(人2)「予備校などがな

い岩手で完璧に指導要領を守っていたら、とてもじゃないが首都圏の学校と競争なんてできない」(農1)。北海道につぐ広い県土をもち、塾や予備校の数も少ない岩手では、全国最低レベルの大学進学率を向上させるため、地域の公立高校が塾代わりをつとめなければやっていけない。岩手で未履修校が多い背景にはそうしたやむにやまれぬ事情がある、との説明は、地方出身の学生たちにとって大いに首肯される、いやそれ以上に心理的共感を誘うものであったにちがいない。地方出身学生ばかりではない。東京出身のある学生なども、「フェアじゃないと思うが、地方の教育環境を考えると、しょうがない気も少しする(あまり塾がないから)」(教3)と、この説明にそれなりの理解を示している。その一方でしかし、隣県青森出身の学生が「岩手県は進学率が低いと言われているが、同じ青森でさえ履修はほとんどされている」(工〔学年不詳])と、あるいは福島出身の学生が「受験対策のためというけれど、しっかり履修して大学合格している人もいるのだから、無理なことではないと思います」(人1)と述べているのは、見過ごせない。

さて、未履修に肯定的な比較的多数の回答者に対し、これを明確に否定する回答者も前者の約半数、人数にして34名ほどいる。未履修をよくないとする理由の一つは、道義的なものである。それは次の意見に集約されている。「国で定めたことであるし、不平等であるから、履修しなければならないものは全員がやらなくてはならない」(教3)。つまり規則はやはり規則だということ、一部の者だけが規則を破り、得をするのは不公平だ、ということである。「やらなければならないと決まっていたことなので、受験のためとはいえ、教員の勝手な意向で未履修にしてしまうのはだめなことだと思う」(教3)「全ての生徒が同じ条件で受験にのぞまなくてはいけない」(農1)。こうしたあくまで規則の遵守や公平性の保持を最優先と考える者は、より現実的な立場から「仕方がない」と判断する者と比べると少数ではあるが、しかしやはりある程度は存在する。そしてそのような人

たちにとって、未履修とは道義的に許されざること以外のなにものでもないのである。

未履修を批判する理由はこればかりではない。教育的な視点においても、それは好ましくないことだとされる。そのような視点からの意見を、(それほどたくさんでもない)以下に列挙しよう。「貴重な知識をたくわえるチャンスを、受験対策のためという理由で学生からうばってしまう事には反対です」(工2)「受験に用いるかどうかに関係なく、履修はすべきだと思う。本来高校での勉強は受験のみが目的ではないと思うので」(人1)「自分が受験生の時、他高校が履修不足だと知っていたら、私達が他科目に費やしていた時間を受験勉強に当てているわけだから、とても腹を立てていたと思う。しかし今となっては、きちんと歴史を勉強できてよかったし、学んでいない人が逆にかわいそうだと思う。受験のための知識ではなく、社会の一員として生きていくうえで、最低限知っておくべき問題だと思うからだ」(人1)「高校までの学校は広い知識を学ぶためにあると思うので、未履修の教科があるというのは問題」(人1)「学ぶべきことは平等に学ぶべきだと思う。それは後々にもどこかで役に立つだろう」(農1)。

共通するのは、高校の勉強はたんなる受験目的ではなく、「社会の一員として生きていくうえで」必要な学力を身につけることだ、とする認識である。必修科目とは、まさにそのような学力を身につけるためもうけられているものだろう、「受験よりも大切なことがあるからこそ必修科目であると思う」(教3)。規則や公平性の問題以前に、だからこそそれは学ばなければならないのではないか。そうした意味で、未履修は「生徒にとっては、本来教わるべきものが教えられなかったということで、不幸なこと」(教3)であるし、「学ぶべきことが学べない、というのは人権問題に関わってくる」(教3)ことだ、とされる。受験のためではない、最低限知っておくべき「知識」や「教養」というのは、以下で見るように、世界史必修をめぐる議論においてクローズアップされてくる観念であるが、これについての仔細は次節に

譲ることとしよう。ここでは関連して、ある学生のユニークな意見を最後に取り上げておきたい。「各高校では進学する人が全てではない。高校卒業後、就職してしまう人もいるから、[必修科目を]教養として身につけておくべきだと思う」(教3)。岩手県のように4割もの高校が未履修となっている地域では、進学しない生徒が未履修となっている場合も少なくないであろう。そのような生徒たちにとって、受験のためという理屈はあてはまらないのではないか。これは見過ごされがちであるが、かなり重大な論点であるにちがいない。さらに同じ学生は、続けて「[未履修は]生徒の将来の選択や興味関心を持つ領域もせばめているのではないか」とも述べている。これは、高校での科目履修と進学先の選択との関連性という、先ほどの議論を想起させる指摘である。

### 3. 世界史必修に対する岩手大学生の認識

世界史が必修科目であることについてどう思うか。この問いかけに対し、必修であることに賛成と答えた回答者は93名、反対は63名、その他賛否の不明確な者(「わからない」「意見なし」を含む)をあわせて31名であった。学部ごとの内訳を示すと、以下の通りである。

	賛成	反対	その他	計
教育学部	34名	33名	21名	88名
人文社会科学部	36名	16名	5名	57名
農学部	12名	7名	1名	20名
工学部	11名	7名	4名	22名

教育学部は賛否ほぼ同数であるのに対し、人文社会科学部は明白に賛成が上回っている。同じ文系学部であっても、教員養成系より人文社会系学部の学生の方が世界史必修に肯定的である、言い換えれば世界史という科目に親和的である、ととらえてよいであろう。農・工学部に関しては、賛成多数の数値が、本当に全体的傾向を表すものかどうかは判断できない。一般論として、理系学生は文系学生ほど世界史に親和的ではなさそうに思わ

れる。したがって、もっと多くの意見を徴していれば、反対が賛成を上回った可能性は十分ありうる。ただ、ごく当たり前のことかもしれないが、理系学生だからといって必ずしも世界史を無用な科目と考えているとは限らない、このことはひとまず確認しておいてよいと思われる。

ついで世界史の履修者・未履修者ごとの数字を示そう。

	賛成	反対	その他	計
履修者	80名	43名	21名	144名
未履修者	13名	20名	10名	43名

数字を見る限り、履修経験者のうち半数以上は世界史必修に肯定的であり、否定的なのは3分の1程度ということになる。未履修者についていえば、反対が多数を占めたのはきわめて当然の結果といえる。かつてほとんど触れる機会のなかった、よく知らない科目に対し、積極的なイメージを抱くというのは、かなりむづかしいことと思われるからである(学ばなかった科目は、「なくても問題なし」と思考するのが普通だろう)。そうした意味からすると、13名もの未履修者が必修に賛成していることの方が、むしろ予想外ともいえる。

さて、回答者たちの具体的な意見内容を、まず必修の賛成派から見えていくことにしよう。世界史学習はなぜ必要なのか。その根拠を語る際、しばしば重要なキーワードの一つとなっているのが、「国際化」である。「国際化が進み、日本ばかりではなく世界にも関心をもった方がいい」(教2)「国際化社会に向けて勉強しなきゃいけないことだ」(農1)「世界の歴史を知るとは、国際化の世の中において至極重要だと思う」(農1)「グローバル化している現代で、世界史は必要だ」(人1)「これからの国際化社会において互いに相手国の歴史や文化的背景を知っておくことは、国際関係を円滑にする相互理解を深めることにつながり、それを学べるのが世界史だと考える」(人1)。外国との交流がますます活発化する現代、相手の国のことを知らずして、どうしてまともな関係を築くことなどできようか。「現代は

周りの国々とのつきあいなしには成り立たない世界であり、それについての基礎知識がないことは、何をするにも意見を言うことができないと思う」(人1)「いろいろな国の人と交流するときに、知っていなければ失礼になるような事が必ずあると思うので、必修であるべきだと思う」(人1)「国際化社会と言われるものの、私達は欧米の歴史はもちろん、近隣国の歴史すら熟知していないのが現状である。私達が多くの人々との交流を持つ際に、彼らのバックグラウンドである歴史とその文化・風俗の配慮することなく付き合うことは難しい。ゆえに、世界史の必修化は当然のことである」(農3)。国際交流の観点から必要だ、というばかりではない。今日、世界の片隅で起こった出来事がわれわれの生活にどのような影響をもたらすか知れない時代である。そうした時代にあって、世界の動きにたえず関心を払い、これを正しく理解することはそれ自体重要なことであり、そのためにも歴史を学ぶことは不可欠である。「[世界史学習は] 時事内容の背景を理解することにつながる」(教3)「現在の世界情勢がどのようにして創られたのか、というようなことを理解するためにも、世界史は必修にした方がよい」(人1)「歴史科目は得意でなかったのが辛かったが、世界情勢を知らない現代では困る」(農4)。未履修者のなかにも、同様な認識から世界史必修を是認する者がいる、「現在の世界情勢を知る基本につながる部分は、かいつまんでやってもいいと思う」(教3)。さらに、外国の歴史を学ぶことは、自国のより深い理解につながる、との意見も見られる。「世界の歴史を学ぶことは、自国の歴史を考える上で不可欠であるから、世界史必修は必要だと思う」(教3)「日本史を学ぶ上でも世界史はしらなければいけない」(教3)「世界に目を向けないと日本のこともわからないので、必修にするのはよい」(人1)。

こうした「何かのために役立つ」——国際交流のためであれ、世界情勢の理解のため、あるいは自国のより深い理解のためであれ——との回答は、しかしながら全体として見ると、少数意見で

あった。より目立ったのは次のような答え、すなわち世界史を知ることは「常識」「一般知識」「教養」だとする意見であった。「最低限の知識は必要だと思う」(教3)「常識として知っておいた方がいい」(教3)「知っておくべき内容がほとんどだ」(教3)「入試どうこうという前に、一般知識・教養として身につけるべきことだ」(教3)「一般教養として高等学校時代に身につけることが望ましい」(教3)「知識を獲得するために必要」(農1)「高校で一般常識を身につけるためには、世界史が必要」(農3)「世界の歴史の、ある程度大まかな流れを知っておくのは、常識人として必要」(工2)「世界の歴史を学ぶのは、多かれ少なかれ必要」(工4)「常識として知っていて当然のことを知らないのでは恥ずかしい」(人1)「知識として必要だと思う。たとえ入試に関係がない人も、やはり学ぶべき」(人1)「世界史の知識が全くない社会人というのあんまり」(人1)「最低限の知識は常識として必要」(人2)。

やや引用が過多となったかもしれないが、世界史を実際に学んだ経験者たちが、その真価として最も重視するのは、まさにこの点なのである。思うに、もし他の科目について同様なアンケートを行ったとして、これほど「常識」や「教養」が語られることはなかったように想像される。いったい、世界史がかくも「常識」や「教養」の科目と評される理由は何なのか。世界史が他教科より本質的に「教養的」だということでは、おそらくないだろう。たとえば日本史は実用的で世界史は教養的だ、などという人は誰もいないはずである。真因はそうではなく、高校と小中学校で教えられる内容のギャップにあるのではないかと思われる。つまり、義務教育で教えられる歴史はまったくの日本史一辺倒であり、外国史にかかわる情報はきわめて貧しい。とりわけ1989年の指導要領改訂(1992年施行)以降、中学校社会科の外国史の記述は着実に削減され、この傾向は現下の「ゆとり」を前面に押し出した指導要領のもと極限まで達した。かくして、若者の多くは外国史の知識をほとんどもたないまま、高校ではじめてこれを事



実上一から学び始めるのが現状となっている。要するに、高校世界史は、この分野に関する「最低限の知識」を伝える機会となっているわけで、もしこれを履修しなければ、下手をするとその人は「常識として知っていて当然のことを知らない」「世界史の知識が全くない社会人」となりかねない。こうした実情を感知しているからこそ、学生たちは世界史を一般常識の科目と評価していると考えられるのである。何人かの回答者は実際、小中学校における世界史教育の欠落をはっきり指摘している。「世界史は中学ではほぼ学習しない。世界の歴史をおおまかでも学ぶことで、日本の歴史もよくわかるし、国際理解にもつながる。やはり歴史は自国のことばかりではなく、他国とのつながりで考えるべきだと思うので、高校で必修にするのは当然だと思う」(教3)「世界史は必修すべきだと思う。小・中学校ではどちらかといえば日本史中心の学習しかやっていないのだから」(教3)「世界史が必修となっているのは重要なことと思います。中学校や小学校で扱う歴史は日本史が大部分を占め、世界史は近現代にわずかに出てくるだけだからです。国際社会を担っていく者として、世界史を履修しておくことは重要であると思います」(教3)。

大学に入ってから、ことに人文社会系の学問を学ぶにあたり、基礎的な外国史の素養が前提とされる場合が少なくない。そのため、世界史を(あまり)やらなかった学生のなかには——「履修しなくても特に今のところ困っていない」(人1)とうそぶく者がいなくはないが——あとあとその必要性を痛感する者もいる。「大学での勉強に世界史は必要だと今自分が感じている。周りに目を向けるためにも、ある程度学ぶ必要はある」(人1)「私も〔世界史を〕やる事にはやったが全くやらないと同じ程の内容や体制だったので、今すごく後悔している。個人的な意見ですが、知っているにこした事はないし、知らないと情けない」(人2)「受験を考えている高校生時代には、よけいな科目を受けたくなかったけど、大学に来てから、世界史がらみの授業をうけている時、うけているも

のとして話され、わけがわからなくなって大変です。ですが、逆にかなり興味ができました」(農1)「当時は受けなくてラッキーと思いましたが、大学に入って後悔しています。損した気分です」(工1)。未履修校の出身で、大検を受験した際、「〔世界史を〕一から勉強するのに苦労した」とするある学生も、「世界史は大学に入ってから必要になる知識だと思うので、世界史は必修の方が良い」(教3)と述べる。

高校ではじめて本格的な外国史に接し、これに大いに啓発される者がいる。「実際に世界史を受けてみて、その影響で私自身大きく変わった点がある」(人1)「私はヨーロッパの歴史に興味があったので、高校の時に世界史を履修したけれど、前までは全くわからなかった世界の状態が少し歴史的背景を感じながら理解できるようになったと思う」(教2)「過去の歴史から、どのように生きるかを学び、キケロやカエサル、マルクス・アウレリウス帝の事績に触れることは、決して単なる暗記では得られない、人生の大きな指針になると考える」(農3)。こうしたいわば世界史ファンの存在が、高校世界史の内容豊かな授業の所産であることは疑いない。ただ一方で、知識がほとんどゼロの状態から、いきなり高校レベルの世界史を学ぶ落差の激しさが、同時に世界史ぎらいを生む要因ともなっていることは否めないだろう。さらに、世界史の価値を認め、その必修化を肯定する者たちのなかにも、授業のあり方への不満がないわけではない。「私が受けてきた世界史で、必修で学ぶべきことが学べたとは思われない」(教3)「教科書の始めだけやるため、近代に近づくほど履修しなくなっているのは問題」(人2)「自分の高校時代を考えても、つめこむだけでは意味がないし、余裕がないと思う。取り組みかたを考えるべき」(教3)「必修なのはいいけど、教科書の途中までしか勉強しないのはやだ。やるなら最後までやってほしい」(工2)「近代史という枠組みを設け、必修にした方が良いと思う。近代史はどこの学校でもさらっと流されているからである」(人1)「やるならやるで、きちんとやるべきだ」(教

3)。詰め込みや、教科書を最後まで終わらないというのは、長年にわたり指摘されてきた世界史教育の宿痾であり、学生たちもこれを重大な問題点として認識していることがわかる。

さて、続いては世界史必修の反対意見に耳を傾けることにしよう。必修に否定的（もしくは懐疑的）な回答者たちが、異口同音に述べるのは、なぜ必修なのかという疑問である。世界史を必修にする理由がわからない、これを義務づける必要はあるのか。こうした疑念を示す意見は、個別に引用していくときりがないほどある。確かに、世界史がいかに大事な科目であるにせよ、ほかに地歴や社会科の科目はいろいろあるのに、なぜこれだけ絶対必修なのかというのは、非常にわかりにくい点である。「世界史だけが必修だというのは正直変だと思う。他の社会の授業も同じ位大切だと思う」（工1）「世界史を学ぶことは確かに必要ですが、私は日本史・地理より優先される理由が分かりません」（人3）「世界史の他にも社会の科目はあるのに、何故世界史だけ必修になっているのが不明である」（人3）。地歴・社会科の他の諸科目同様、世界史も生徒の自由な選択に委ねればよいのではないかと。こうした意見が出るのは、ごく自然なことである。「世界史のみを必修にするのではなく〔・・・〕選択必修の形をとればよい」（教3）「社会科の中で自分でいくつかをえらび必修にするような選択必修の形をとればよい」（工2）「確かに〔世界史は〕大事な科目かもしれないが、選択制でよいのではないだろうか」（人3）。もしどれかをあえて必修にというのなら、それはむしろ日本史であるべきなのではないか。「日本人なので日本史を必修にすべき」（教3）「まず日本のことを知ることをのほうの方が大切だと私は思うので、世界史必修は疑問である」（教3）「まず自分の国のことを知るべきだと思うので、世界史ではなく日本史を必修にする方がいい」（工4）「世界史より日本史を必修にするべきだと思います。日本人が日本のことに興味がないのに、なぜ世界に目を向けさせるのが疑問。日本のことを知って世界のこともすればいいと思います」（人1）。日

本史を必修にすべきとの意見は、世界史必修の反対者ばかりでなく、賛成者のなかにも見られる。「世界の歴史・思想などは、知るべき事であると思うので、世界史必修でよいと思う。しかし世界の歴史は知るべきだと言いながら、自国の歴史は必修でないという事が納得いかない」（人1）「自国のことをよく知らずに世界史を習うのは恥ずかしいと思うので、日本史も必修にした方が良くはないか」（人1）。

以上のような、世界史を「特別扱い」することへの疑念にくわえて、何人かの回答者は、学習者の意欲の観点から、科目の自由な選択を主張する。「生徒の選択した科目を深く学ばせた方が、理解や関心につながるのではないか」（教3）「〔地歴三科目から〕自分の興味をもつ二つを〔選んで〕履修する方が、意欲を持続させ学習できると思う」（教3）。「やりたい人がやればよい」（人1）「好きな人は勉強すれば良い」（人1）というのも、同じ見方であろう。理系学生の間にはまた、世界史学習の負担という意見も見られた。「今の週五日制においては、地歴教科二科目を理系クラスが文系クラスと同じ授業数で学ぶことは無理があると思います」（農1）「授業で受けるのはいいが、必修なのは理系には厳しい現実だと思う」（工1）「世界史まで受けていたら、私は大学に行けなかったかもしれません」（農1）。週休五日制のもと地歴二科目を履修する大変さにくわえて、世界史固有の問題、すなわち記憶すべき情報量の膨大さが、この科目に対する高校生たちの忌避感を増幅させているのはまちがいない。おそらく理系学生の回答者がもっと多ければ、この種の意見もそれだけ多数寄せられたことであろう。ただ一方、少々意外な気もするが、文系学生のなかには、学習の負担を世界史必修の反対理由に挙げる者は——「私は地理もやったが全く覚えていないのが現状。さらに情報量の多い世界史は覚えられなかったと思う」（教3）と記した1名を除き——いなかった。

興味深いのは、未履修が起こった主因とされる、入試との不整合を、必修反対の直接的理由として挙げる者があまりいないことである。そうした考

えを明言するのは、次の2名のみである。「受験科目で使われない科目を勉強するのは、子どもにとって意味ないことと思う」(教3)「受験科目にしているのは東大・京大と聞いたので、必修でなくてもよい」(教3)。このほか、前出とはややニュアンスを異にするが、受験科目でない科目を学ぶことの学習効果を問題視する意見もある。「世界の歴史を学ぶことは大切だと思うが、学んでも受験に必要な科目のように必死には学ばないので、身につかない気がする」(人1)。なるほど、「正直日本史を受験科目としてとっていたので、世界史Aをとる意味が分からなかった」(教3)「[センター試験に無関係な科目をやるのは] 迷惑だった」(農1)との声は散見されるし、これらが受験生の本音であることはまちがいないであろう。しかしにもかかわらず、実際あからさまに「受験に出ない科目は不要」と主張する者は少数であるという事実は、やはり注意に値する。入試に出ない科目をやるのは正直つらいし、そうした科目の履修が省略されがちな状況は「仕方がない」であろう。だからといってしかし、そんな科目はやらなくてもよいと正面から主張するのはためらわれる。どうやら、これが多数の認識であるように思われる。若者たちは、本音はともかく少なくとも建前上は、学校の勉強が受験勉強ばかりとは限らない(また、そうあるべきではない)ことを、一応は了解しているようである。

とはいえもちろん、世界史を履修した者の3分の1近くが世界史必修の必要なしと答えている現実には、あらためて確認しておかなければならない。そのように答えたのは、何も「私にとっては[世界史の勉強は] 時間のムダだった」(人1)「世界史の授業を受けたが、無駄な時間であると思った」(農1)と述懐する学生ばかりではない。世界史はなかなか面白かった、好きだった、ためになった、そう述べる学生もまたなかにはいる。彼らにとって、世界史はなるほどためになるものではあったが、それでも義務的にやらせるほどとは思えなかったのである。受験生たちは、時に受験に関係のない科目も学ばなければいけないことを了

解するにせよ、かといって意義を認めがたい科目まで学んでいる余裕はない。それゆえ彼らはしきりに、世界史はなぜ必修なのかと、疑念を口にするのである。「なぜ世界史を必修にしなければいけないのか、明らかにしてほしい」(教3)「なぜ世界史がそんなに必要かという一人一人への説明も必要だと思う」(人[学年不詳])。これは、どうせ学ぶなら納得して学びたいという、多くの者に共通する心のうちを代弁した意見といえるだろう。

### むすびにかえて

以上、世界史未履修問題に関する学生アンケートの結果をやや詳しく紹介してきた。学生たちは総じてこの問題に高い関心を示しており、アンケート調査に対し真摯な回答を寄せてくれた。その回答からわれわれが汲み取るべき事柄は少ない。以下では最後に、筆者自身とくに気になった二三の点について少しばかり個人的意見を述べ、読者の参考に供することで、むすびにかえたいと思う。

第一点。未履修学生の一部に、世界史を履修しないで後悔しているとの声が見られた。学習の機会をいたずらに失い、あとで後悔するというのは、まことに残念な事態といわざるをえないが、では未履修に特段不都合を感じていない者はこれでよかったのかというと、もちろんそうとはいえない。そのような者も、世界史を学ぶことでもしかすると何かを得ていたかもしれないのである。アンケート結果からすると、世界史履修者の大半はその必修を支持している。このことから、実際に学んだ者の多くは、この科目に全員が履修するに足だけの価値を見いだしたと認めることができる。なかには、世界史を学んだことで「私自身大きく変わった点がある」とさえ語る者がいる。未履修者のなかにも、同じ思いを抱くに至ったであろう者が、絶対いないとは断定できないだろう。さらに先述のように、高校での科目履修は生徒の進路選択に影響をもたらすことがありえたかもし

れない。とすると、未履修は極言すれば生徒の将来にかかわる問題であるともいえる。

必要な科目を履修するのは、生徒の「義務」ではなく「権利」である。公教育を担う学校が、どのような事情があるにせよこれを教えないというのは、それゆえ——まさに学生の一人が指摘するように——ある種の「人権問題」だといえる。しかるに学校がそれをあえて行い、生徒に不利益を与えたところに、未履修問題の本質の一つはある。田城賢司氏は、「学校としての最大の問題は、受験という名目であれ生徒の学習権を奪ってしまったことにある」と喝破するが（田城「高校世界・世界史学習の現状」『歴史教育・社会科教育年報』歴史教育者協議会編、三省堂、2007年、139頁）、筆者もやはり同感である。

第二点。世界史必修を支持する回答者の多くは、「常識」や「教養」を根拠に挙げている。このこと背景には、もし筆者の理解が正しければ、義務教育課程で外国史がほとんど教えられないという現実がある。高校で世界史を履修しないと、外国史のごく基本的な知識すら得られないままになってしまう、少なからぬ学生たちはそう感じているようである。これは、世界史必修の意義を考えるうえで重要な事実だといえる。世界史必修の理由について一般的には、国際化の時代に必要だから、と説明されるのが通例である。だがそのような大義以前の現実問題として、多くの若者たちにとってこれが実質的に外国史を学ぶ唯一の機会となっているという点は、もっと強調されてしかるべきではないか。

現在の地歴教育の組み立ては、まず自国史と地理の基礎を習得したうえで、はじめて外国史を学ぶ手順になっている。これは一つのやり方ではあろうが、必ずしも現状に見合っていない部分があるのを否定しがたい。義務教育での外国史の不在と、その後やって来るかなり詳細な世界史との落差は、ややもすると学ぶ側の世界史ざらいを増長しかねない。そうした落差を少しでも緩やかにするため、カリキュラム上の工夫として、地歴の統合科目や、また世界史と現代社会との融合科目

の導入もありうるかもしれない。それから、義務教育課程の歴史教育があまりに日本史一辺倒になっている現状もあらためる必要があるであろう。

第三点。世界史必修への反対意見のなかには、なぜ世界史が必修なのかわからないとする声が多く見られた。筆者は、若者たちがこうした疑問を抱くのはごく自然なことと思う反面、彼らより二十歳以上年長の世代に属する者として、同時にやや違和感も覚えずにはいなかった。個人的経験からいうと、かつて教育現場では、学校教育と受験とは別物であるとの共通理解が厳然としてあり、教師たちは——受験を大なり小なり意識しつつも——教科そのものの魅力を伝えるべく、かなり自由に授業を繰り広げることができた。生徒の側も、受験はあくまで個人的問題であると考え、教師たちの時に「個性的な」授業を受容し、楽しむようなところさえあったように思う。このような学校文化のなかで、生徒が学校で教えられる特定の科目について、それをやる意義自体を疑問視したり、まして無駄な科目なぞやらないでくれと教師に訴えたりするようなことは、ほとんどありえなかっただろう。今はしかし、状況が大きく転換したようである。若者たちは、かつて以上に受験とそして階層化された大学序列というものを強く意識し、高校の授業をよりプラグマティックにとらえるようになってきている。その結果、受験効率の観点から無駄なことはやりたくないとする意識がますます強まっている。こうした意識変化が生じた転機を、丹羽健夫氏は1990年代はじめと見ている。氏によると、この時期ちょうど第二次ベビーブーム世代が受験を迎え、一時的に受験競争が熾烈化したことを契機に、「受験合理主義」が台頭したとされる（丹羽「高校履修漏れの背景」日本経済新聞、2006年11月27日）。私見では、大学進学率の急伸（＝大学大衆化の一層の昂進）も重要な要素であるし、また大きな背景として、バブル崩壊以降における社会経済の構造変化も見逃せないと思われるが、ここでこの問題に深入りするのは控えておきたいと思う。

注意すべきはしかし、以上のような全体的な意識変化にもかかわらず、依然として「本来高校での勉強は受験のみが目的ではない」と主張する若者が少数ながらやはりいること、さらに世界史必修に反対する者にあつてさえ、受験に不要だからという理由を正面切って唱える意見はほとんど見られないことである。受験合理主義の抗いがたい潮流のなかにあつても、なお高校教育の理念に対する意識はかろうじて存続しているようである。「受験に不要な」世界史を学ぶ意義を生徒にわからせる余地は、残されているといえるだろう。生徒が納得して学習するため、場合によっては、一部のアンケート回答者が求めるように、教師があらかじめこれを説明するというやり方もありうるかもしれない。しかしより重要なのは、生徒が納得するような授業を実践することであるのは、いうまでもない。履修のとば口は強制であるにせよ、結果的に世界史を学んで良かったと思う、あるいはのちのち有益だったと思える、そのような授業を生徒に提供できることが最も本質的である。世界史の存立意義を回復するための最良の手段は、学習指導要領の強制力の強化ではなく、良い授業を行うことである。このきわめて陳腐ではあるが、まがうことなき真理を最後に確認したところで、ひとまず稿を閉じることとしたい。

## 謝 辞

アンケート調査の実施にあたりご協力いただいた武田晃二先生、ならびに社会科教育の専門の立場よりご助言いただいた土屋直人氏に感謝します。